論文審査の要旨

1.本研究の位置づけ

初期言語発達研究においては、1語発話期から2語・多語発話期への移行が注目されてきた。その中で動詞の学習に関しては国際的にも多くの研究者が関心を持ってきた。本研究は、英語圏で注目されてきた「力動出来事語」に着目し、わが国ではまだ着手されていない自閉症スペクトラム障がいの子どもの力動出来事語と、その初期動詞への移行過程、および2語・多語発話の発達との関連性について検討した実証的研究である。また、1語発話期から2語発話期にある定型発達児の縦断的観察資料から日本の子どもにおける力動出来事語の使用を示し、力動出来事語から動詞への移行を詳細に検討し、擬音語・擬態語，そして名詞によって表現されている力動出来事的表現の日本語における特徴を明らかにした。さまざまな力動出来事的状況での力動的情報を日本語で子どもはどのようにはっきりさせているかを示した点はこれまでの研究になく、動詞の学習に関して新たな切り口を示した点で評価できる。その上で、自閉症スペクトラム障がいの子どもの力動出来事語の特徴を明らかにし、2語・多語発話との関連を示していることは彼らへの言語指導を今後考えていく上で意義がある。

2.本論文の特色と評価

文献的考察においては、これまでの自閉症スペクトラム障がいの子どもの2語・多語発話に関する研究を整理し、力動出来事語について検討する必要性を明確に示した。次に、自閉症スペクトラムの子どもの2語・多語発話の発達の縦断的資料を基に、動詞獲得の重要性を明らかにした。それを踏まえて、MLU（平均発話長)、1.00～2.43 の期間に注目し、自閉症スペクトラムの子どもの力動出来事語に関して、英語圏での知見を基に、その特徴について事例的検討を行っている。さらに、日本の子どもでの力動出来事語について、定型発達乳児の力動出来事場面の設定による縦断的観察資料から、力動出来事的側面における音声的表現に着目し、力動出来事語や動詞への移行過程を示した。これはこれまでの初期言語発達研究では見られず、高く評価できるものである。その中で、英語圏の力動出来事語に関する研究結果と異なり、本研究で対象とした日本語を学習している子どもでは、事物と力動性との意味を区別しているというよりも力動的な状況を捉えていることを指摘した。それらの結果を基に、自閉症スペクトラム障がいの子どもの力動出来事語と2語・多語発話との関連について検討した結果、定型発達の子どもの力動出来事語獲得過程にみられる特徴と共通する点と力動出来事語においてもパターン化された語は語結合に移行しにくい点など、自閉症スペクトラム障がいの子どもの固有の特徴を明らかにした。これらの結果は、自閉症スペクトラムの子どもの今後の動詞獲得や2語・多語発話の発達支援への示唆を与えるもので、評価できる。

3.判定

以上のように本論文は、初期言語学習過程にみられる日本の子どもの力動出来事語を明らかにし、そこからの語の分化や2語・多語発話につながる動詞学習との関連性を示し、今後の自閉症スペクトラム障がいの子どもの初期言語発達研究の発展につながる成果が示されているものであり、博士(人間文化学)の学位を授与するに相応しいものと認める。